

平成 21 年 4 月 20 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720154
 研究課題名(和文) メンタリングの手法を活用したアクションリサーチ実践研究指導者育成システムの開発
 研究課題名(英文) Development of Mentoring Program for Facilitating and Supporting Action Research
 研究代表者
 三上 明洋(MIKAMI AKIHIRO)
 近畿大学・語学教育部・講師
 研究者番号：80321446

研究成果の概要：

本研究では、アクション・リサーチ実践研究におけるメンター（指導者）を育成する教員研修システムを開発し、実際に大学英语教員 2 名からの参加協力を得て、約 6 ヶ月間に渡ってアクション・リサーチの実践を支援するメンタリングを試みた。その結果、メンタリングの実践が、アクション・リサーチの支援を充実させるとともに、メンターを育成する効果的な方法となる可能性を示すことができた。ただし、参加教員数の不足や個人情報の保護という観点からメンタリングの経過や結果をデータベース化し、ウェブ上で広く公開するところまでには至らず、今後の課題として残された。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	500,000	0	500,000
2007 年度	300,000	0	300,000
2008 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	90,000	1,190,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育、アクション・リサーチ、メンタリング、教師研修

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、英語教員によるアクション・リサーチの実践を支援するためには、適切な助言や支援を提供することができるメンター（指導者）を育成することが必要

であると考え、2 人の教員が継続的・定期的に交流を図るメンタリングの効果的な活用方法を探ることとした。しかし、日本の教育分野では、まだメンタリングの研究は

始まったばかりであり、教師の成長を助ける高い効果が期待され始めてはいたが、その手法を活用した教員養成・研修はほとんど行われていないのが実情であった。最近ではメンターという言葉を目にする機会が以前に比べて増えてきてはいるが、本格的なメンタリングの実践例はまだ少ないのは現在も同様である。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は、アクション・リサーチ実践研究におけるメンター（指導者）の育成を図るため、(1) インターネットを活用したアクション・リサーチにおけるメンター（指導者）育成のための英語教員研修プログラムとその実施サポート・システムを開発すること、(2) 同研修プログラムのメンター（指導者）育成に対する効果を検証すること、(3) 各メンター候補者およびメンティ（アクション・リサーチ実践初心者）によるメンタリングの経過と結果をデータベース化し、ウェブ上で広く他の英語教員等に公開すること、の3つである。

3. 研究の方法

これまでにメンタリングの研究が最も盛んに行われている経営組織における先行研究を基に、アクション・リサーチ支援としてのメンタリングの実践方法とその指導者の育成方法を探り、本教員研修プログラムとその実施サポート・システムを開発した。そして、大学英語教員2名からの参加協力を得て、開発した教員研修プログラムの活用を試み、この実践研究の結果に基づき、本教員研修プログラムの効果と問題点を明らかにした。

4. 研究成果

平成18年度は、まず、先行研究を基に、教員養成・研修のあり方を探るとともに、メンタリングの定義、機能、効果、問題点などについて考察し、アクション・リサーチ実践研究指導者育成を目的とするメンタリングの手法を活用した教員研修プログラムの具体案をまとめて発表した（三上，2006）。また、その具体案に基づき、アクション・リサーチの実践研究指導者を育成する教員研修プログラムとその実施サポート・システムの開発を行い、研究代表者が、中学・高校・大学の英語教員6名のメンターとなり、各教員によるアクション・リサーチの実践を支援するためにメンタリングを試みた。さらに、その実践経験を基に、初めてメンタリングを行うメンター候補者を対象に、アクション・リサーチ支援としてのメンタリングの進め方に関するガイドラインを作成し、その具体的な実践方法を明らかにした（三上，2007）。

平成19年度には、前年度に開発したメンタリングの手法による教員研修プログラムとその実施サポート・システムを活用し、新たに大学英語教員2名からの参加協力を得て、約6ヶ月間に渡ってアクション・リサーチの実践を支援するメンタリングを実践した。この実践期間中、研究代表者は、コーディネーターとしてメンター候補者とメンティによるメンタリングの実践をモニターするとともに、両者に必要な助言・支援を提供した。その結果、メンティは初めてのアクション・リサーチの実践であるにもかかわらず、メンター候補者からの支援によって、その1サイクルを最後までやり遂げることができ、メンタリングの実践が、アクション・リサーチの支援を充実させるとともに、メンターを育成する効果的な方法となる可能性を示すことができた。

平成 20 年度には、前年度に実践したメンタリングの経過と結果を詳しく分析し、メンタリングを企画・運営するコーディネーターの役割を具体的に明らかにするとともに、参加したメンター候補者とメンティを対象に実施したアンケート調査の結果を基に開発した教員研修プログラムの効果と問題点を明らかにした(三上, 2009)。また、三上・三上(2008)では、アクション・リサーチの実践においてメンティが直面する問題点を挙げ、その解決に向けたメンターからの支援方法について述べ、アクション・リサーチの実践を核とするメンター/メンティ制度の導入を提案した。さらに、3年間に渡るすべての研究成果をまとめて、研究成果報告書を作成・発行した(三上, 2009)。

このように、本研究では、アクション・リサーチ実践研究におけるメンター(指導者)を育成する教員研修システムを開発し、実際に大学英語教員を対象にそのシステムを活用し、その効果や問題点を探った。本研究において、特に、アクション・リサーチの実践を核とするメンタリングというこれまでにほとんど実践されたことのない新しい試みを他の英語教員からの協力を得て実現することができたことは、とても意義深いことであった。ただし、参加教員数がまだ少ない上に、メンタリングの実践には個人情報保護という観点から公開を控えた方がよい情報が多く含まれてしまうため、当初の研究目的の1つであったメンタリングの経過や結果をデータベース化し、ウェブ上で広く公開するところまでには至らなかったのは残念である。今後は、引き続き、本教員研修システムに改良を加え、それを活用したメンタリングの実践研究を積み重ねていきたい。それによって、日本の

英語教育におけるアクション・リサーチ支援としてのメンタリングがさらに広く実践されるようになり、その結果としてデータベースの構築が実現し、さらにはどのような形でデータベースの公開を行えば、メンタリングを進める上で役に立つ情報を提供することができるのかという公開のあり方についても探ることができるものと考えている。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

三上明洋(2009)「メンタリングによるアクション・リサーチ実践研究指導者育成の試み」中部地区英語教育学会紀要 38 pp. 301-308. (査読有)

三上明洋・三上由香(2008)「アクション・リサーチのメンター/メンティ制度のすすめ」『英語教育』11月号 大修館書店 pp. 34-36. (査読有)

三上明洋(2007)「アクション・リサーチ支援としてのメンタリングの進め方」近畿大学語学教育部ジャーナル第3号 pp. 169-180. (査読有)

三上明洋(2006)「英語教員研修におけるメンタリングの活用について」近畿大学語学教育部紀要第6巻第2号 pp. 35-52. (査読有)

[学会発表](計1件)

三上明洋「メンタリングによるアクション・リサーチ実践研究指導者育成の試み」中部地区英語教育学会第38回長野大会 2008年6月28日、清泉女学院大学

[図書](計1件)

三上明洋(2009)「平成18~20年度科学研究費若手研究(B)研究成果報告書メンタリングの手法を活用したアクションリサーチ実践研究指導者育成システムの開発」85

ページ

6 . 研究組織

(1)研究代表者

三上 明洋 (MIKAMI AKIHIRO)

近畿大学・語学教育部・講師

研究者番号：80321446